

# 新聞作りを通しての日本語の話し方指導の試み

横 田 淳 子

## はじめに

留学生が大学に入学する前に受ける日本語予備教育の中級レベルにおいて、話し方の指導の目標になりうるものにはどんなものがあるであろうか。留学生のニーズの検討から、あいさつ、質問、応答、要求、説明、発表、議論、感情の各表現形態が目標としてあげられるが、このうち、はじめの6つの表現形態を目標とした指導に関しては2年前に授業報告を行った。<sup>(1)</sup>

今回は前回の話し方指導の際に扱わなかった表現形態である議論を目標とした指導に関して報告する。

## 1 議 論

### 1-1 「議論」

はじめに、この論文で使う「議論」の定義を明らかにしておく。

『新明解国語辞典』によると、議論は「(ある問題に関し)自説の陳述や他説の批判を相互に行い、合意点や結論に到達しようとする・こと(やり方)」となっている。「討論」は「特定の問題について意見を述べあつての議論すること。ディスカッション」となっている。さらに「ディスカッション」は「話し合い、討論」となっている。このように「議論」「討論」「ディスカッション」は、一般的には明確な区別をせずと同じような意味で使われているようである。この論文では、「お互いに相手の意見を聞き、かつ自分の意見を述べ合うこと」をすべて一つにまとめて「議論」と呼ぶこととする。

なお、「ディスカッション」は「ディベート」とともに、外国語教育の分野では中級以上の段階の話し方の指導のための活動の名称としても用いることがある。この論文でも、ディスカッション、ディベートを一般的な議論・討論の意味とは別に、特定の指導方法や活動の形態の名称(詳しくは後述)として用いることとする。

### 1-2 議論の困難点

中級レベルの学習者は基本的な文法事項や表現はすでに一通り学習している。

しかし、現実の場面で日本語を話すことがなかなかできない。それは、実際のコミュニケーションの場面で、教室で学習した知識を十分に活用できないからである。語彙の不足や中・上級の文法事項が未習だということは、聞き取りができない理由としては大きいと思うが、話すことに関しては、学習した範囲のことばを使ってある程度言い表すことが可能なはずである。言いたいことを表す適切なことばがわからなければ、それを説明して相手からそのことばを覚えてもらうこともできる。むしろ、そのようにして教室以外で自分で語彙を広げて行くべきである。そのためには、既習の学習事項を現実のコミュニケーションの場で使いこなす話し方の練習が中級レベルで是非とも必要になってくる。

話し方の中でも議論は難しいといわれている。ここで、実際に外国語を使って議論する場合、何が議論を困難にさせているのか、考えてみたい。

基本的に1対1のコミュニケーションであるあいさつ、質問、応答、要求などの会話は予想がつきやすいし、わからなければ聞き返すことができる。発表はまえて準備ができるので、自分の発言を時間をかけてチェックすることが可能である。しかし、数人で行う会議などでの議論は相手の論点の予測が難しく、また、わからなかったからと言っていちいち聞き返すこともしにくい。自分の発言も相手の意見によって臨機応変に変えざるをえず、まえて準備しにくい。発表と異なり、話す能力とともに聞く能力も強く要求される。

それでは、議論をする時一般にどのような行動を取るか考えてみたい。まず、相手の意見を聞く。そして、相手の言っていることの意味を頭のなかで理解し、反応する。次に、反応した意見をまとめ、自分の意見として話す。このような活動を瞬時に行っているのである。外国語で議論するのが難しいのは、外国語ではこのような活動を瞬時に行うのが難しく、それぞれの活動に時間がかかるため、頭の中で自分の意見をまとめ、述べようとした時には、話の流れは先にいってしまい、話す機会を失ってしまうことに一因がある。このような議論に必要とされるスピードと即興性が議論を難しいものになっている。

議論のもつスピードと即興性に対処するためには、複雑な内容であっても、また、わからないことばがでてきても、そこで止まらず、聞きながら全体の流れを素早く的確につかみ、それに対する自分の考えを、頭の中で日本語で組み立ててから発言するのではなく、話しながらことばを見付けていく、といった練習が必要である。そのためには、ここで自分の意見を述べておかなければならない、是非述べたいという、発言への強い動機を学習者にもたせなければならない。教室

の中ではなかなか外国語が上手にならないが、仕事上の取引やトラブルの解決といった実践を通して外国語で議論できるようにまでなったというケースが多いのも、話さずにはいられない切羽詰まった状況を数多く経験した結果だと思われる。

実生活では、ある問題に対して意見を述べる時、全くニュートラルな立場というものは少なく、多くの場合、教師の立場、学生の立場、医者の方の立場、患者の立場というものを背負っている。立場や役割を背負っているために、それぞれの立場を主張しておかなければならなくなり、議論はそれだけ真剣なものになる。

学習者に、具体的な立場を背負わせ、議論せざるをえないような状況にほうり込むことによって自分が外国語を使っているという意識をできるだけ忘れさせ、ことばの形よりも内容を伝えることを優先させるような活動を行わせて、話し方の練習の場としたい。このような目的に適した学習活動として、ディスカッション、ディベート、ロール・プレイ、プロジェクト・ワークが考えられる。

### 1-3 議論の練習方法

#### (1) ディスカッション

ディスカッションでは、議題を決め、問題領域を明らかにした上で、学習者それぞれが自分の意見を外国語を使って述べ合うのが基本である。学習者は他の人の意見を聞き、それに対して即座に反応し、自分の意見を述べる。その際、それは賛成意見でも反対意見でも補足意見でもかまわない。学習者は議題に対して、賛成か反対かどちらかの立場をとることを強制されない。ディスカッションでは、自分の意見・考えを正しく伝えること、相手の感情を害さないように伝えることが学習目標となる。

ディスカッションの活動をするにあたっては、何についてディスカッションをするのか、なぜそのことについてディスカッションするのか、ディスカッションによって何を得ようとするのか、できるだけ学習者に明確にすることが望ましい。ディスカッションの結果が学習者の生活に実際に影響を及ぼすようなものであれば、ディスカッションをする強い動機づけになる。したがって、ディスカッションでは議題の設定のしかたが特に重要となる。

議題の設定のしかたのひとつとして、ひとりの学習者が問題提起の発表をし、それに関して他の者が意見を述べていくという方法がある。この方法は研究会やプロジェクト・チームのように同じ問題意識をもっている集団の場合にはよい。しかし、話し方の授業の中では、発表者は、発表するためにその問題について資料を読み、原稿を作り、準備してきているわけで情報量が多いが、発表を聞いてい

る者はその問題に関して予備知識がなく、情報量が少ないことになる。そのため、議論というより、質疑応答の形になりやすい。発表を聞いている者が発表の内容に関心をもっている場合はいいが、そうでないと質問者の発言の動機は弱く、コミュニケーションの必要性から自発的に発言するのではなく、授業の中の活動として教師に促されて発言することになりがちである。

## (2) ディベート

ディベートは、ことばを使った知的なゲームであり、人工的なものである。ことばを使ったゲームであるので、ことばをおもしろく操作でき、知的な興味を満足させるという利点がある。ディベートは一般に話し方の学習活動としてとらえられているが、実際は、資料を読み（読む技能）、原稿を用意し（書く技能）、相手の意見を聞き（聞く技能）、自分の意見を言う（話す技能）という4つの技能を含んだ総合的な言語活動である。競技としてのディベートはこれらの活動の最終段階に行われるもので、それまでの準備段階にこそ4技能のことばの練習が多く含まれているのである。このような準備段階を通らずに、いきなり競技としてのディベートをまねた即興ディベートを教室で話し方指導の方法として行っても、ディベートの学習活動としての利点が十分に生かされないと思われる。

競技としてのディベートをする場合、参加者は賛成か反対かのどちらかの立場を取ることになる。これはくじなどで予め決められ、参加者の実際の意見と同じとは限らない。個人的には賛成の意見をもっている、反対の立場をとらされることがありうる。それだけことばを使った高級な遊びという要素が強い。人為的に対立させ、論理的に説得力のある話し方を訓練する、あるいは楽しむものなのである。

即興ディベートを外国語で行うには、議題が普段関心のうすい時事問題などであれば、背景知識や専門用語がわからず、議論がなりたたない。また、使う用語のやさしそうな議題というので「ペットには猫よりも犬がいい」などというのを選べば、議論が不活発になるおそれもある。即興ディベートは議題の設定が難しいことが難点のひとつとして上げられよう。

即興ディベートのもうひとつの難点は、ディベートのやり方、ルールなどを十分に学習者に徹底させ、参加者がそれを楽しむ雰囲気を作り、ゲーム性を発言の動機づけにしないと、発言が自発的なものにならないことである。教室で話し方の授業で行っているから、成績に関係するから話すというのでは自発的な話し方にはならない。

### (3) ロール・プレイ

ロール・プレイは、学習者に話す場面、状況、役割、立場、表現意図（たとえば、提案をする、提案を受ける／断る）だけを与え、その意図を伝えるための適切な言語表現（ジェスチャーなど非言語表現も含む）を学習者に自由に選ばせる方法である。具体的な表現の形は与えず、表現意図だけを与えるため、学習者は実際のコミュニケーションの場面に近い状況におかれることになり、そのような状況の中で話し方を練習することになる。

実際のコミュニケーションの場面では、教科書に書かれている会話がそのままの形で進むことはなく、コミュニケーションの相手の出方に応じて常に臨機応変に対処していかなければならない。そのためには考えながら自主的にことばを選んで話す練習が必要で、ロール・プレイはその練習に適している。また、役割、立場が指定されるので、演じることの好きな学習者には楽しい練習になる。

ただし、与えられた場面や人間関係等に適した表現の形式を選んで使う練習（たとえば、待遇表現の練習）にはよいが、少し抽象的な意見を交換する議論をロール・プレイで行うのは難しい。ディベートと同様に、ロール・プレイでの議論の内容は学習者自身の意見と異なる可能性があり、学習者は直接自分の意見をそのまま表現することができないことになる。そのため、人為的な論理の展開とその表現という二重の負担を学習者に負わせることになる。

### (4) プロジェクト・ワーク

グループでひとつのプロジェクトを行うプロジェクト・ワークは、学習者が自分達でプロジェクトを計画し、ひとつの作品を作っていくものである。プロジェクトを遂行するためにはグループ内での議論は欠かせない。グループのメンバーとして言うべきことは言わずにはおけないはずである。みんなで一つのプロジェクトを行うという共同作業の中で出てくる議論は学習者にとって本質的なものであり、必要に迫られての真のコミュニケーションとなる。日本語の話し方の授業において、真の議論を生み出すような状況を作り出すものとして、今回は新聞作りというプロジェクト・ワークを行ってみることとした。

## 2 新聞作りを通しての日本語の話し方指導例

### 2-1 クラスの説明

クラスは6カ月から5年の日本語学習の経験をもつ既習者7人からなる。7人の背景は以下の通りである。

	国籍	性別	専門	日本語学習期間	日本滞在期間
A	シンガポール	女	日本語	5年	3.5週間
B	シンガポール	男	情報工学	5年	0
C	オーストラリア	男	経済	2年	1.5か月
D	オーストラリア	男	経済	2年	5年
E	タイ	女	経済	1年	1年
F	フィリピン	女	日本語	6か月	1年
G	ニュージーランド	男	経済	4年	0

日本語の学習年数に差があるが、学習期間の短いEとFは二人とも高校時代に一年間のホームステイをし、日本の高校にも在学していた経験があるため、日本語に慣れている。反対に学習期間の長いBとGはこれまでに日本滞在の経験がない。Dは母親が日本人であるため、他の学生より日本語を話すコミュニケーション能力がある。ただし、滞り期間のほとんどは5歳以下の幼児期である。

1学期の授業の開始に先立って、学生を一人ずつ呼んでインタビューし、以上のような背景知識を得た。日本語の話し方に差はあるが、それぞれ日本語で自分のことに関して以上のような情報を説明する能力を有していた。

## 2-2 新聞作り

1学期前半は初級文型の復習練習や漢字導入に半分ほど費やし、話し方の授業としてはいくつかの場面会話と自分の国についての発表に使った。発表の際には、文法的に正しいかどうか確信がもてなくても、まず自分が言いたいことを言うてみることを心掛けるようにと学生に伝えた。学生の発表はテープに録音し、発表の後、間違いの訂正、それに関連する文法の復習と表現・語彙の練習を口頭および練習シートを使って行った。1学期前半で発表をかなりスムーズに行えるようになった。

1学期の後半の20コマ（1コマ=45分）ほどをプロジェクト・ワークの新聞作りにあてた。時間的にはだいたい以下ようになった。

- |   |                            |     |
|---|----------------------------|-----|
| 1 | 新聞作りオリエンテーション              | 2コマ |
|   | 会議で使うことばの練習（編集会議に向けて）      |     |
| 2 | 第1回編集会議 各人の記事のテーマ、取材方法を発表  | 2   |
|   | 第1回編集会議フォローアップ「なぜ会議が失敗したか」 |     |
| 3 | 学生C, D, Fのインタビューの項目チェック    | 2   |

	インタビューのやり方の練習, 教室内での練習	
4	第2回編集会議 学生A, Eのアンケートの項目チェック 第2回編集会議フォローアップ	2
5	第3回編集会議 学生Bの記事の項目チェック 第3回編集会議フォローアップ	2
6	第4回編集会議 学生Gの記事の報告と他の人の中間報告 第4回編集会議フォローアップ	2
7	第5回編集会議 学生Eのアンケートについて 第5回編集会議フォローアップ	2
8	第6回編集会議 学生C, D, Gの記事について 第6回編集会議フォローアップ	2
9	第7回編集会議 学生A, E, Fの記事について 第7回編集会議フォローアップ	2
10	第8回編集会議 新聞名, 見出し, 順序	1
11	割り付け, イラスト, 広告, 印刷	1

つぎにそれぞれの活動で実際にどのようなことを行ったか述べていく。

#### (1) オリエンテーション

会議などで意見を述べ合う議論を話し方の1学期後半の大きな学習目標にすることを学習者に知らせ、そのために新聞作りというプロジェクト・ワークを行うことを告げた。まず、中学や高校で新聞を作った経験のある学生には新聞作りの体験談を話させた。7人のうち、3人が新聞作りの経験をもっていた。1人が英語の授業で、1人が歴史の授業で、1人が課外活動で新聞を作ったということであったが、外国語で作るのはどの学生にとってもはじめての経験となった。次に日本語学校で筆者が3年前に受け持ったクラスで作った新聞を配り、記事の長さ、見出し、内容などの点で、どのようなものが作れるのか、学生にイメージをもたせた。

タスクと学習目標を明示したプリント(資料1)をわたし、新聞作りで実際に何をすることが期待されているのか、どんなことを学習するのが目標になっているのか、の2点を各学習者に確認させた。タスクは「日本の社会に関する記事を書いて新聞にすること」としたが、この場合、新聞の読者としては国にいる友達、家族の方が自然かもしれない。しかし、そうなると、母語で書くことにな

り、日本語で書くことはナンセンスである。日本語で新聞を作らせるために、読者としては日本語学校の他の学生やホームステイ先の日本人などを設定した。

記事のテーマとしては結婚に限定した。これはこのクラスの読み方を担当している教師が速読用に結婚に関する記事や読み物をすでにいくつか読ませていたこと、記事のテーマを学習者の自由とするとそれを決めるまでに多くの時間を費やしてしまうこと、また、テーマが分散すると書いた記事に対して学習者がお互いに共通の基盤がもてないことなどの理由による。

学習目標は『プロジェクト・ワーク』の学習目標を参考に作った<sup>(2)</sup>。学習目標に4技能、特に話す技能のいろいろな能力を列挙することによって、学習者に、この授業では新しい文法事項を学んだり、語彙を学ぶことが目標ではなく、既習の文法・語彙の知識を上手に活用して日本語を使ってのコミュニケーション能力を養成することが目標であることを印象づけたいと考えた。

学生の役割はクラス新聞の記者として記事を書き、編集会議に出席すること、そしてそれぞれの記事の内容を討議すること、編集会議では毎回交代で編集長の役になり、会議の進行役を務めることとした。教師である筆者の役割は新聞社の社長のようなもので、編集会議ではオブザーバー的な立場をとる、記事の内容についてはよほどひどいものでなければ何も言わない、印刷や新聞作りに必要なものは用意すると、学習者に伝えた。

## (2) 会議で使うことばの練習

編集会議を学習活動の中心の場としたので、はじめに、会議での司会者のことばと会議での発言のしかたの例を提示したプリント(資料2)を渡した。プリントは、これらのことばの形を教えるためではなく、会議を効率的に運営するために必要なことばを学習者が実際に必要な時に参照するためのものと考えた。実際の授業の編集会議では、司会を担当する者は、あらかじめ司会者のことばをプリントを参照しながら用意してきており、積極的に使っていた。会議のはじめや終わりのことば(例:「時間になりましたので、そろそろ始めたいと思います」や「時間になりましたので、きょうはこれで終わります」)は司会役をした学習者全員に使われた。また議論の進行をはかることば(例:「その点についてはまた後で話し合いたいとおもいます」や「もう少し詳しく説明してください」)も司会役のことばとして使われていた。議論が始まってからの発言者のことばは、プリントに提示された形式を使う必要性があまりなく、ほとんど使われなかった。



### (3) 第1回編集会議

第1回編集会議では、各学習者が記事のテーマと取材方法を発表し、お互いに発表を聞きながら表に書き込んでいくことをタスクとした。記事のテーマを決めることとその取材方法を考えてくることは前回の授業の際に宿題とし、司会役も決めた。会議では、各学習者が順番に発表していただけなので、意見の違いによる議論にまでは発展せず、聞き取れなかったことを聞き返すこと、確認すること、説明を求めることなど、議論の前提となる言語行動が行われることと思われた。

会議のために机を円形に並べ、中央にはテープレコーダとマイクを置いた。今回の会議の議題は議論に移る前のウォーミングアップのような言語活動なので、編集会議は比較的問題なく、スムーズに進むものと予想していた。ところが、最初の20分ほどは話がかみ合わず、うまくいかなかった。それは、司会者が「何を記事に書くつもりか発表してください」というような具体的な質問をせず、「ではみなさんの意見はどうですか」と順番に聞いていったために起こった。意見を求められた人は何について聞かれているかよくわからなかったようだが、「何について聞いているのですか」と司会者に聞かず、そのかわりに、「まだわかりませんので、ほかの人に聞いてください」と答えた。司会者は仕方なくほかの人に同じ質問をしたが、ほかの人も議題が何かわからず、「よくわかりません」や「まだ考えていません」と答えた。そのため司会者はみんながまだ書きたいテーマが見つからないとみて、「みんなで結婚前の男女交際について調査したり、アンケートを取ったりしたい」と具体的な提案をした。ここで、「ひとりでそのようなことを決めるのはおかしい」「いや、わたしは今日の司会者、つまり編集長なのだから決めることができる」ということになり、司会者とその他の学習者の間にコミュニケーションの混乱が起こった。

ここで筆者が学習者に改めて何を新聞の記事として書きたいか考えてきたかと聞いたところ、みんなそれぞれ考えてきたと答えた。もう一度司会者に質問を戻し、順に聞いていってもらった。その結果、新婚旅行、理想的な結婚相手の条件、日本の典型的な披露宴、結婚における学歴の差<sup>(3)</sup>、結婚後両親と同居するか別居するか、結婚相手をどのようにして見つけたか、離婚、の7つの結婚に関するさまざまな側面がテーマにあげられた。取材方法としては、アンケート(2人)、インタビュー(3人)、図書館へ行き、新聞、雑誌、本などの資料をまとめる(2人)という3つの方法が出された。インタビューを予定している学習者に

インタビューの質問を準備してくることを宿題とした。

#### (4) 第1回編集会議フォローアップ

前回の第1回編集会議の録音テープの中で会議が紛糾している箇所を再生し、なぜコミュニケーションがうまくいかなかったかを話し合った。司会者の質問のしかたと質問の趣旨がわからなかった時の確認のしかたなど会議の進行方法について、どうすればよかったか意見を出しあった。次に全員の記事のテーマと取材方法を、各人が会議でメモした表をもとに確認し、はっきりしない箇所はテープを再生し、学習者全員が他の人が何をどのような方法で書くのか把握しているようにした。

#### (5) インタビュー

インタビューを予定している学習者（3人）が書いてきた質問項目をプリントし全員に配り、質問が適切か、日本語としてわかりやすいか、ほかに付け加えるべき質問はないか、などをみんなで検討した。これは会議という形は取らず、教師がみんなの意見をまとめながら指導していくという形を取った。原案に対して必要な修正、加筆、削除が行われた。

次に、インタビューの手順とそれぞれの場での典型的なことばを提示したプリント（資料3）を配って、基本的なインタビューのやり方について指導した。インタビューを行う3人の学習者には教室内で他の学習者や教師を相手にインタビューする練習をさせた。そして実際にインタビューを教室外で行って来ることを宿題にした。

#### (6) アンケート

アンケートを予定している学習者（2人）にもアンケートの項目を作ってくることを宿題にしてあった。インタビューの質問項目の検討と同じように、書いてきたアンケート項目をプリントし全員に配り、検討した。今回は編集会議（第2回）の形を取り、学習者の一人が司会役を行った。項目の検討は比較的問題なく進んだが、どのような形のアンケートにするかで議論になった。答えを書かせるのか、項目に順番をつけさせるだけにするのか、回答者に名前、国、性別まで書かせるのか、アンケートの対象はだれなのか、日本人以外の場合は英語の翻訳が必要なのか、効率よく回収するためにはどうすればいいかなど、議論すべきことは山ほどあり、活発な意見交換となった。

#### (7) 編集会議

第3回以降第7回までの5回の編集会議を通して、全員の間接報告、記事の構

成や原稿の検討を行った。会議にかけるべき資料や原稿の準備が少なく、時間が余ったときは、教師が用意した結婚に関する読み物や資料を適宜使った。

それぞれの学習者が用意してきた新聞記事についてその構成や原稿を検討する際には、学習者の話し合いで、新聞が対象とする読者（主に日本語学校の他の学生）<sup>(4)</sup>の日本語レベルを考え、今まで習ったやさしい日本語で書き表そうということになった。そして、どうしても必要な難解なことばには英訳をつけることになった。このやさしい日本語を使うということは、漢語に頼りがちな漢字系の学習者にとっていい練習になった。たとえば、図書館に行って結婚に関する日本語の本をいくつか借り、それをまとめた漢字系の学習者は、本の漢字語彙をそのまま引用して原稿に書いた。会議で他の学習者からその一つ一つに説明を求められ、やさしい日本語で言い換えていく過程で日本語らしい話し方になっていった。

単純な文法的な間違いの多くは他の学習者から指摘され、訂正された。また、難しい内容を言おうとして論旨がねじれたものは、わかりにくいので説明してくれと言われ、原稿を書いた学習者が会議で自分の言いたいことを説明していくうちに論旨が明快になったり、他の学習者からそれならこの文章はいらないので、こういう言い方をしたらもっとわかりやすいのではという提案や助けを受け、わかりやすいものになっていった。

#### (8) 編集会議フォローアップ

編集会議と同じ日ではなく次の日に、テープの再生によって発言の発音、語彙、文法、表現上のチェックを行った。教師が会議の間にメモした間違い箇所やテープを聞いて気付いた箇所をあらかじめチェックしておき、教室で学習者にその箇所を聞かせた。まず当の発言者に訂正させた。自分ですぐに訂正できるものもあったが、間違っていて覚えていて、正しい形がわからないものもあった。その場合は他の学習者に訂正させ、正確なものを提示するという方法をとった。

発音は、アクセントや長音（例：とけい→統計）の間違いは、会議の時やテープの再生でも教師が気がつくが、撥音（例：たぶ→多分）、清音と濁音（例：どころ→ところ）の間違いはチェックしにくかった。そのため、最後に原稿を見て直したものも多かった。

語彙の誤用としては、意味の似ている知っていることばを使う（例：この質問をたすのはどうですか。→加える）、正確な形が定着していない（例：わたしの気持ちにみっちりです。→びったり）、日本語のことばを知らない（例：多数決、決を採る）に分けられる。議論しているときコミュニケーションができなくなるほど

ひどい間違いはほとんどなかった。それだけに形が正確でないものはテープを丹念に聞いて初めて見付けられる間違い（例：なかなかがいい→仲がいい，まもなく→まもなく）も多かった。

文法の誤用としては，既に学習している事項の間違い（例：配った前に→配る前に，進みません→進んでいません，どこの国が行きたい→どこの国に行きたい，短いのほう→短いほう，悪くないそう→悪くなさそう）がほとんどであった。これらはテープを聞かせると発言者が直ちに自分で訂正できるものが多かった。

表現の誤用としては，司会者に発言を求めるとき何と呼びかけたらいいかはじめに教えなかったため，「司会者さん」とか「司会者の方」と呼びかけていた。日本語では，仕事上の会議で編集長や課長が司会役をしていれば「編集長」とか「課長」と呼びかける場合が多いこと，今回のような会議では名前を呼ぶこと，さらに一般的には直接の呼びかけをあまりせず，「いいでしょうか」とか「はい」といって司会者の注意を促して発言を求めることが多いことを伝えた。

表現上の誤用の多くは，待遇表現の誤用である（例：見せてあげます→見せませす，読んでもらいたいですか→読みましょうか）。この種の誤用は発言者に威張っている意識はまるでないのであるが，聞いているものには尊大な態度に聞こえ，その結果人間関係も悪くしかねない。このクラスには日本滞在の経験が長く，日本語でのコミュニケーションに慣れている学習者が多かったためか，この種類の誤用には敏感に反応し，不快感を示していた。テープで再生して当の発言者に聞かせても何が間違っているのかわからない場合が多かった。誤用が出るたびにどのように聞こえるのか，なぜいけないのか，どう言えばよいのかを話し合い，提示した。

もう一つの表現上の誤用は「です・ます体」を使うべきなのに「だ・である体」を使うことである（例：「ワープロは使いますか」／「使わない」→「使いませぬ」）。これも発言者にはその気がなくても聞いている人にはぞんざいな話し方に聞こえる。話し方の授業できちんと直したい点である。

表現の上での誤用とまでは言えないが，「ではこれから理由を教えましょう」や「ゆっくり話しますから，ノートに書いてください」「よく頑張りました」などの発言は「まるで〇〇さんが先生みたい」と，反感を買った。なぜ先生の発言のように聞こえるのか，学習者で議論し，問題点を考えた。また，誤用ではないが日本語らしくするためには補助動詞を使ったほうがいいもの（例：アンケートを返さない→返してくれない，アンケートが返らない→返ってこない）も，クラス

の日本語レベルを考え、フォローアップの際の指導の対象とした。

#### (9) ワープロ化

3年前にクラスで新聞を作ったときには学校にまだ学生用のワープロがなく、新聞は手書き原稿を縮小コピーして作った。今回はちょうど1学期のはじめに学生用のワープロが入ったため、すべてワープロで記事を書くことに学習者たちが決めた。筆者のクラスではワープロの扱い方までは指導しなかったが、学習者同士で教え合い、原稿はすべてワープロで書いてきた。学習者同士が編集会議で十分話し合い、他の学習者の記事についてもどこをどのように直すべきかお互いに了解していたので、最終原稿は学習者同士で互いに責任をもって校正させた。コピーする前に最終原稿を一応筆者がチェックした。

#### (10) 新聞の名前、見出し、割り付け、イラスト、広告

最終原稿が出揃ったところで、最後の会議を行った。まず新聞の名前を決めた。次に各記事の見出しを討議したが、最終的には記事を書いた記者の意見を尊重した。次に記事をどのような形で配列するか話し合った。堅い内容と柔らかい内容を交互にするとか、ジャンケンで決めるとかいろいろな意見がでたが、現実の結婚の過程をたどる形で配列しようという提案がなされ、全員一致で記事の配列は以下ようになった。1「私の結婚相手は・・・」2「独身注意」3「結婚相手を捜すには」4「披露宴」5「9½ DAYS」6「同居か、別居か」7「離婚の増加」(「」内は各記事の見出し)。

実際に記事を割り付けてみると、いくらか余分なスペースができた。学習者たちは写真を持ち寄ったり、広告文を作ったり、イラストを入れたりした。このような作業の時は英語がすぐに飛び出しそうになるが、日本語で話すように厳しく言うておいたため、少なくとも教師のいる前では日本語でコミュニケーションをしていた。A3用紙3枚の表と裏に印刷し、それを半分に分けてA4判12ページの新聞になった。割り付けに予定していたより時間がかかり、放課後に残って仕上げることになってしまったが、自分達の新聞を日本語で作ったという喜びは大きかったようである。

#### おわりに

今回、話し方指導の一つの方法として新聞作りというプロジェクト・ワークを使ってみた。自発的な発話を促し、十分な発話の機会を与えるという点では編集会議はその機能を果たしたと思われる。ただし、その結果、話す技能、特に議論

の技能が十分に養成されたかという点、これは話す技能の評価のしかたが困難なため、明らかにすることはできない<sup>(6)</sup>。自分の話す技能に対する学習者の主観的な判断は聞くことができるので、1学期の最後の話し方の試験の一つの質問として、「新聞作りを通して、あなたの日本語は、何が上手になったと思いますか、何が進歩したと思いますか」と聞いてみた。話すことが上手になったという答をひそかに予想していたのであるが、7人のうち6人の学習者が文法が進歩したと答えた。文法といっても新しいことを教えたわけではないので、頭では理解していたが、話すときに間違えていたのが間違えず、正しい形で言えるようになったことを言っているのだろうか。

話し方のような技能養成のクラスの目標は抽象的である。目標をできるだけ具体的な形で表そうと動詞の形（例：理由を言うことができる）にしたところで、何を基準としてその目標に達しているか見ると明確に表せない。文法や語彙、漢字であれば、新しい知識を与え、学習者に自分の日本語が進歩したと実感させることができる。学習の成果を形で表しにくい技能養成のクラスであるからこそ、新聞作りとか研究発表とかレポート作成など、成果が形として後に残るものを行って、学習者に達成感を味わわせることが必要なのではないだろうか。

今回は、教室外での活動となった取材に関しては指導の対象としなかった。しかし、インタビューやアンケートの実施、あるいは図書館や結婚式場などでの資料収集活動の中には、話し方指導の材料となるべきものが数多く含まれている。実生活では何かを行う（情報を得る、伝える）ために話す。プロジェクトのために行う言語活動を通じて話す技能を指導することは、実際のことばのあり方に近い形でコミュニケーション手段としてのことばを教えることになる。いろいろな工夫によって、プロジェクト・ワークは有効な話し方の指導方法になりうると思われる。

#### [注]

- (1) 横田(1988) 参照。
- (2) バルダン(1988) 7-8 ページ。
- (3) 資料を収集する過程で、なぜ今日本で結婚をしない人が増えているかというテーマが変わっていった。
- (4) 日本語学校の他の学生は日本語の学習経験をほとんどもたずに入学してくるため、筆者が話し方を担当したこのクラスが一番進んでいる。

- (5) 議論の技能の評価のためには、グループで実際に議論させてみる形式が必要であると思われるが、その評価のしかたはまだ十分に検討されていない。今後の課題である。

[参考文献]

- (1) 岡崎志津子ほか (1987) 『ロールプレイで学ぶ会話(1)』 凡人社。
- (2) 岡崎志津子ほか (1988) 『ロールプレイで学ぶ会話(2)』 凡人社。
- (3) バルダン田中幸子ほか (1988) 『プロジェクト・ワーク』 凡人社。
- (4) バルダン田中幸子ほか (1989) 『ロールプレイとシミュレーション』 凡人社。
- (5) 松本茂 (1987) 『英語ディベート実践マニュアル』 バベル・プレス。
- (6) 『新明解国語辞典』 第3版 (1985) 三省堂。
- (7) 横田淳子 (1988) 「日本語中級における話し方指導の試み」 (『日本語学校論集』 15号)
- (8) Fried-Booth, D. L. (1986) *Project Work*, Oxford University Press.
- (9) Ur, Penny (1981) *Discussions that Work*, Cambridge University Press.

[資料1]

プロジェクト・ワーク 『新聞作り』

タスク

日本の社会に関する記事を書いて新聞にする。

特集：「結婚」

読者：日本語学校の学生，先生，事務の人

YWCAのお母さんと家族

ホームステイのホストファミリー

友達

学習目標

話す：くらべる

理由を言う

意見を言う

提案する

相手の提案に対して賛成の意見，または反対の意見を言う

質問する

説明を求める

物事を決める

読んだこと，見たこと，聞いたことをまとめて言う

頼む

あいさつする

聞く：説明や報告を聞いてポイントをつかむ

意見を聞いて，その理由と意見を理解する

相手の話の中から自分の求める情報を聞き取る

提案を聞いて賛成や反対の立場を決める

読む：新聞記事や資料を読んでポイントをつかむ

グラフや表を読む

書く：見たこと，聞いたことをまとめてメモを取る

聞きたいことを文に書く

報告や紹介の文を書く

調べたことと自分の意見を分けて記事にする

グラフや表を書く



[資料 2]

会議で使うことば

司会者のことば

1 会を始める

例：時間になりましたので、始めたいと思います。  
みなさん、お集まりのようですから、そろそろ始めます。  
〇〇さんがまだ来ていませんが、時間ですので会議を始めます。

2 会を進める

(1) はじめに

例：今日は××について話し合いたいと思います。  
今日の議題は××です。  
今日はみなさんに××の報告をしてもらいます（いただきます）。

(2) 意見を求める

例：〇〇さん、どうぞ。  
〇〇さん、どうですか（いかがですか）。  
どなたかご意見はありませんか。

(3) 発言者の意見に対して、反対や賛成の意見を求める。

例：〇〇さんの意見についてどう考えますか（お考えですか）。  
今の（ご）意見に賛成ですか、反対ですか。  
ほかに何か（ご）意見がありますか。

(4) 議論を整理する

例：もう少し具体的に説明してください。  
もう少し詳しく言ってください。  
その点についてはまた後で話し合うことにしたいと思います。

3 会を終える

例：時間になりましたので、これで終わりにします。  
時間が来ましたので、終わります。ありがとうございました。

発言者のことば

1 発言を求める

例：いいでしょうか。  
（手をあげて）はい、わたしは・・・

2 他の人の意見に対して、賛成の意見を言う

例：〇〇さんの考えでいいと思います。  
今の意見に賛成ですが、少しつけどわえると・・・  
××についてはいいとおもいます。

3 他の人の意見に対して、反対の意見を言う

例：今の意見にはちょっと反対です。  
わたしは ～ したほうがいいと思います。  
今の意見でもいいですが、・・・はどうでしょうか。

〔資料3〕

インタビュー

1 相手と約束する

(1) インタビューする理由を説明し、話を聞きたいと伝える。

例：今度クラスで新聞を作ることになりました。私は××について記事を書きたいので、今、調べています。先生のお話を伺ってもいいですか。

(2) 相手がいいと言えば、話を聞く時間と場所を決める。

例：今、聞いてもいいですか。

今、お時間がありますか。

いつがよろしいでしょうか。

2 インタビュー

(1) はじめ

例：早速ですが、

まず××からお聞きしたいと思います。

(2) 考え、感想を聞く

例：

××についてどう

{	思いますか。
	思われますか。
	お考えになりますか。

××について

{	先生のお考えを	}	お聞かせ下さい。
	〇〇さんのご意見を		

(3) おわり

例：お忙しいところ、ありがとうございました。

## **Teaching Japanese Speaking Skills through the Making of a Newspaper**

YOKOTA Atsuko

This paper reports how an intermediate Japanese class was conducted so that the students could acquire Japanese speaking skills, especially in discussion. In order to provide the students with a lot of occasions to discuss, the author chose a project of making a newspaper in Japanese. The students were encouraged to use Japanese intensively in the process of collecting the materials for the newspaper articles, such as interviews and questionnaires, as well as in the editorial meetings.

Project works such as making a newspaper seem to be useful in terms of creating situations of genuine communication in a target language.